落窪物語　堤中納言物語

日本古典文學大系

日本古典文學大系22

今昔物語集 一

山田孝雄
山田忠雄
山田英雄
山田俊雄
校注

岩波書店刊行

今昔物語集一　　日本古典文学大系 22

昭和 34 年 3 月 5 日　第 1 刷　発行 ©
昭和 50 年 8 月 10 日　第 8 刷　発行

定価 2300 円

校注者　山田孝雄　山田忠雄
山田英雄　山田俊雄

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行者　岩波雄二郎

長野市中御所 2-30
印刷者　田中忠

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説……三
凡例……四三
巻第一　天竺一……四九
巻第二　天竺二……一三一
巻第三　天竺三……二〇一
巻第四　天竺四　付仏後……二六五
巻第五　天竺五　付仏前……三三五
補注……四〇三
校異……五〇一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

解説

一　総説

「今昔」で始まり、「トナム語リ伝ヘタルトヤ」で説話を結ぶことを原則とする本集の語り方は、種種の意味で本集を特徴づけ、その長短を決定づける。即ち、本集は、その成立に当って、日本霊異記・三宝絵詞・法華験記・地蔵菩薩霊験記（ただし原撰本）等の、国内において編纂された説話集、および、法苑珠林・経律異相・三宝感応要略録・冥報記・衆経要集金蔵論・金剛般若経集験記等、海彼で編纂された説話集等を粉本とし、それらによって触発されたことは、既にいい古されたところであるが、如何ほど多くのものを先行文献から受け取ったにせよ、右の形式は先行の如何なる説話集にも直接には負っていないのである。即ち、いわば本集において創成せられたこの形式は、本集の説話集としての体系を整える為には必須のものとして絶大の効果を発揮したが、その反面、読者に単調・画一の感を与えることが無かったとは決していえまい。また、末尾の語の周辺には取ってつけたような教訓臭が芬芬としてただようことは否定できないが、このような教訓的態度は、説話集・寓話集としてはその編纂動機の上からいっていわば必要欠くべからざるものである。その範囲内において考えるならば、本集のそれは前記先行文献に比べてみてむしろ稀薄といえるのではなかろうか。もし、本集に相当程度の文芸性が賦与せられるならば、先ずそれは第一に右に述べた如き教訓性の稀薄に求められるべきものであろう。

次に、本集と前後の時代に成立した説話集とを比較する時、容易に気づくことは、本集に空空しい文学的修辞、いわゆる美文調の見られぬことである。即ち、和漢の混淆が既に行なわれているとはいえ、本集の漢的要素は、三国伝記や私聚百因縁集等が将門記以下太平記に至る軍記物と同じく四六駢儷体における対偶の手法を多く取り入れ、美辞麗句を好んで使うのとは自ら異なり、いわば、その長所たる論理的思考・簡潔なる表現を専ら摂取した点に特徴を持つ。朗朗誦すべき言い廻しには乏しいかもしれぬが、何気ない簡単な表現の端端に隠された鋭い諷刺と巧みな譬喩とは、深遠多岐な仏教教理の根本義を不知不識の間に読者・聴者に畏怖と同感とを与えつつ滲透させずにはおかなかったであろう。また、人生の真実を観照した簡勁の筆致は自ら読者・聴者の共鳴を感じさせずにはおかなかったであろう。美文による婉曲な表現と実用文による端的な表現とは、現象的に見るならば、全くのうらはらであり、文芸表現としては世世その褒貶を異にする。一は一旦虚構のヴェールに蔽い包むことによって却って生生しき真実を象徴せしめ、一は事実・素材をありのままに露呈し、提示することによって現実を生生しく把握せしめる。即ち、真実を把握させる方法は作成動機に応じて当然分かれるが、真実追求の一路においてはなお共通のものがあろう。本集にして読者を退屈せしめず、感銘を与えるものが有りとすれば、それは右の如き意味の文芸性が全巻を貫いているからに外ならぬ。勿論、本集においても前者に類する表現が全く無いではない。例えば天竺部においても、燼杭太子の話における園遊会の描写(226-11以下)、一角仙人の話における自然描写(351-10以下)、亀が鶴の助けを借りて空中を飛行する話における自然描写(390-16以下)、法華経を十行よんだ故に夫に眼を抉り取られた妻が代りに天眼を得る条(305-14～15)等は、極めて部分的ではあっても比較的文飾に勝った場面であるが、換言するならば、これらが目立つ程、他の多くの部分にはかかる表現が乏しいということを意味する。

普通、美文において和漢混淆という時、その和的要素は、かな文学の文体と語彙とをとり入れることを意味するが、本集の場合には左様なものは比較的少く、寧ろ生活語としての口語の豊富なとり入れが意義を持つ。それは、登場人物

に生きた会話を語らせることによって各説話に躍動感を与え、聴者に対する説得力を大にするためには当然取らるべき方法であった。

結局、本集の文体の基盤をなすものは、実用文としてのドライな漢文訓読的筆致と、編者が読者に、登場人物中の主人公が相手に、同一事項を繰り返し説明する、説話独特の口調との交錯ということになろうが、かかる簡勁と冗長という対蹠的な性格が交錯し、対立したまま混在することは注目すべき事実であろう。

更に考えれば、同様な矛盾は翻訳に際しても窺われる。即ち、本集の筆致には原典の具体的な記述をなるべく一般的なものに置き換えんとし、或は固有名詞を故らに省き(→巻五㊅九)、或は後に補充すべく空白にした箇所がかなり多い。また、省略の甚だしきは十数段に及ぶものも有る位である。ところが、一方においては具体的・当代的、また日本的な注釈を附加し、ヴィヴィッドな描写を行なっている。その具体的な例を挙げるならば、国王を天皇、その勅書を宣旨、采女を女房・命婦、庭園を前栽、というが如き、また、年に干支、月日に四季を冠し、「何況ヤ…可思遣シ」と適宜に附加し、「速ニ」「无限ク」「即チ」等という副詞を任意に追加し、時には原典に見られない長文の具体的叙述を追補するなど、その翻訳態度は不羈奔放を極めている。これらは勿論、ある意味では、編者の文芸的配慮に基くものともいえようが、やはり読者・聴者を予想しての潤色であること、彼の五山の僧侶の詩文の講説における、また、講釈師の講談におけると左程大きな径庭は有るまい。

世上多く、本集世俗部に比して天竺部の興味索然たることを、その翻訳なるが故に、また特に原典に忠実なるが故に帰する向きが多いが、事実は正に正反対である。例えば、天竺部において考えるならば、その翻訳態度は決して逐語訳・直訳を主とするのではなくして、寧ろ意訳・翻案を交えての部分直訳ということに尽きよう。結論的にいうならば、原典は常にある程度の分量と面白さとを備えているのに対し、本集が特に原典にない敷衍を機宜に応じて行なって

成功した場合は、本集の方が数等文芸としても価値を持つ。これに対し、原典説話における挿話的部分を末梢的なるが故に切捨てることが多くなった場合には、本集の説話としての興味は減殺される。かような場合、編者は恐らくかの水戸の歴史学者が参考本において行なったと同様な意識をもって原典に斧鉞を振ったのではあるまいか。右の如きいわば梗概のみの説話においては、史実とも仏典解説とも文芸ともつかぬ中途半端な性格を持つに至ることは必至である。

かように、編者は翻訳に際しても二元的な態度を以て臨んでいるが、更に全般の表現についていうならば、頭注の随所に指摘したように同一の副詞・名詞・動詞を屢々同一句・同一文、隣接句・隣接文に繰り返し用いていることと、それにも拘わらず、一方においては同義の語の範囲内でつとめていいかえをし、また用字を変える現象を忘れてはならない(仮に前者を重言、後者を避板法と呼ぶことにする)。避板法は、シナにおいても我国においても韻文作成の場合の基本的手法の一つと考えられるが、一見無造作に見える本集の用語・用字にかくも顕著な手法がかくの如く頻繁に窺えることは正に驚異すべきであり、これだけでも本集の洗錬された文芸的方法が知られるのである。これに対して重言は、口語における強調表現、もしくは無意識による畳用と見るならば、正に避板法とは対蹠的な性格を持つが、その中には文芸作品でも愛好されるものも自ら存するので、無条件で矛盾・対立と断ずるのは早計といわねばならぬ。

本集各話における頻出語は、助辞や固有名詞や指示代名詞を除けば、恐らく、前掲副詞の「即チ」「无限ク」のほかに、述語としての「无限シ」接続詞「然(而)ル間」「然(而)ル程ニ」「其ノ時ニ」「其ノ後(ニ)」等が尤なるものであろう。これらは、原典に拘わらず、翻訳に際して任意に追補される所のものであるが、いわば、各段落の有機的な連絡を果すために案出されたものと思われ、本集の文が比較的短文であることとそれらが大概かかる接続詞によって論理的に、また、一定のリズムを以て接続されることとを雄弁に物語る。副詞の「即チ」「无限ク」は、本集の一つの特徴的表現であり、前者は一種の接続語として本集の躍動感の源泉としての役割を果す。後者は「无限シ」「无量シ」「无並シ」と共に強調表現で

はあるが、極めて概念的であり、いずれも「無」を伴なうことは、恐らく兵火・天災など現世の厄害にさいなまれ通した院政末期の知識人がこの語にそこはかとなく漂う無限感にその宗教的祈念と諦観と一種の希望とを籠めたのではないかとも思われる。果して然らば、これらは単なる誇張表現もしくは陳腐な常套表現ではなくして、編者の心理の機微を探るべき一つのキィにもなりそうである。

本集の編纂が果して一人の手で行なわれたか、二人以上が参加したものかどうか、末流貴族の手になったか、無名の緇徒によって取り行なわれたか、その成立については今猶定説を知らない実情であるが、その編纂動機についても唱道のためとか、趣味としての説話蒐集のためとか、自ら論者の見解によって分かれる。今、これらとは切り離して本集を味読するに、因果応報・生者必滅・会者定離等の仏教の教理を具体例に基いて分かり易く、しかも一定の説話体系に従って敷衍する編者の意図は十分に察せられると共に、一つの主眼は、百千の金を以てする布施よりも一団の泥を以て破塔を修治する至心、夫婦の間に一枚しか持たぬ畳を施して悔いぬ実の心、要するに貧者の一灯を尊しとする精神、何気なき善根によっても是の如き功徳を得るのだからまして至心をこめた善根の結果は思い半ばに過ぎるであろうということを度度強調する。また、それらにまじって、まま、古代印度の風習かと思われる事ども(成人した子に向って実母が乳房をおせば、必ず乳がその口に入る126-5 357-4~6)・(産スル時ニハ物ヲ不見ヌ事也、衣ヲ引纏テ有レバ産ハ安キ也271-14)・(女子ニハ父ガ財宝ヲ不伝ズ186-3)・(夫妻愛念セル者、夫死ヌレバ其ノ妻ヲ生ナガラ埋ム183-1)・(必ず夫婦同伴で会に出席すること→補三九八)・(臨月には婦が自の実家に帰って産をする→巻二四三三)や、善悪不二の思想(348-6)や一種の世間智(世ノ人或ハ心吉ト云ヘドモ形不随ズ、或ハ形チ吉ト云ドモ心ニ不叶ズ63-16)・(或ハ咲ノ内ニモ悪シキ思ヒ有リ、或ハ恋タル形ニモ瞋レル心深シ366-1)が説かれる中に、稀ではあるが、人間自身に対する痛烈な皮肉(378-9・382-8~9)、時には僧侶自身に対する諷刺(82-10以下・243-10)が見られることは頗る興味をそそられる。

本集はその分量の尨大なるが故に、恐らく直接によむものとしてはさほど行なわれず、専ら聞くものとして、また、別個の説話集を馴致するという形で絶えず成長してきたに違いない。そのことは、本集における古本と流布本との対立が、余りにも顕著であること、後者の前者に対する落差が余りにもひどすぎること、一言でいえば、後者には何等成長したとみるべきものはなく、窺えるのは脱文また脱字、それに衍文の連続・累積にすぎない事実を以てしても明かである。さればとて、かの太平記読みに比すべき講釈の事実も未だ明かにされていない。本集は、中世において長く埋もれ、漸く近代、例えば芥川竜之介などによって発掘されたと世に称せられるが、実は恐らく絶えず断続的に、また断片的に竜之介の如き興味をもって本集を繙き、本集をよみひろめた人の数は世世に少くなかったことであろう。その或者は本集編者のひそみにならって宇治拾遺物語を編纂し、また或者は三国伝記・私聚百因縁集等の書を成してきた。そういう意味で本集は、久しく孤独をかこってきたのであるが、江戸時代中葉において井沢長秀という一知己によって始めて版行されるに至った。しかしながら長秀も本集にとって勝義における善知識ではなかったようである。何となれば、彼は本集の本朝部にしか着目しなかった。しかも刊行に当っては、編次を全く改め、別個の書の如き編輯を行なった後公刊したのである。尤もかかる風潮が現代にもなお脈引くことを考えるならば、彼一人の罪に帰すべきでないことは勿論である。いわば、本集には後人に新たなる説話集編纂を意図させる何物かを持っていたというべきが真に近かろうか。

書名・編者・成立年代

今昔物語集という書名は、現存最古の写本、鈴鹿本（鎌倉中期の写）に既に見えるが、古記録では寧ろ珍しく、多聞院日記や大乗院文書（内閣文庫蔵）中の安位寺殿御自記、宝徳三年七月四日の条に「今昔物語七帖返進貞兼僧正畢」と見えるほか（後者は岡見正雄氏の教示による）、降っては本朝語園に今昔物語とするのが注意されるくらいである。中外抄・宝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

物集・河海抄・園城寺伝記・真言伝・雑談集等は、本集と同類の説話集を宇治大納言物語、乃至、宇治大納言隆国物語として引くのが普通である。これらに引かれた説話の中には本集と共通のものも少くないが、また本集に見えないものも存し、言う所の宇治大納言物語と本集とが果して同一書か否かは頗る疑わしい。現に、看聞御記・実隆公記では宇治大納言物語と宇治拾遺物語とを同一視している如くに思われる。

本集の編者を源隆国とすることは、右の如き宇治大納言物語と本集との同一視、もしくは、前者を後者の原撰形態とすることに基くが、事情右の如くであって見れば、その決定力を欠くだろうことは思い半ばに過ぎよう。以上に対し、本集の記事の中に貴族的社会に在った人物なら決して犯すはずのない誤謬が少からず存する事実から推すならば、大寺に所属する、無名の書記僧を以て編者に擬する論の生れ出ることは必至ともいえよう(↓今野達氏論文「今昔物語集の作者を廻って」国語と国文学、昭和三十三年二月)。

現、今昔物語集に即して本集の成立年代の特に下限を考えるならば大要次の如くになるであろう(現在までの諸家の論証の経過は省略する)。巻二十四の第五十六は高階為家の播磨守在任中の話であるが、為家は承保四年九月十九日(水左記)に播磨守と見え、同十二月十八日法勝寺金堂造営の功によって播磨守重任の宣旨をうけた(法勝寺供養記)。承暦五年三月十七日(帥記)にも播磨守と見え、応徳三年十一月二十六日には伊予守で昇殿し(柳原家記録)、播磨守在任中の事は栄花物語にも見える。従って為家の播磨守在任中に隆国は没している。この話は播磨守任終後の話と思われるから隆国以後の話である。巻二十四の第五十七は藤原盛房の伝聞する所としている。盛房は応徳三年十一月二十六日、蔭孫、正六位上で蔵人となった(柳原家記録、大日本史料三ノ一引用)。恐らく出身の初期の事と思われるので、この時以後のことと思われる。巻二十八の第三十四には筑前の前司藤原章家が見えるが、章家は延久四年の任(魚魯愚鈔)で、承暦四年八月十四日には筑前前司(水左記)と見えるので、一任四年とすれば承保三年に前司となった筈で、恐らく隆国以後のものであ

ろう。巻二十九の第二十七は主殿頭源章家が肥後守の時で、その没後の説話であるが、章家の没年は未詳である。嘉承元年十月十六日肥後章家（永昌記）、治暦三年三月十六日中宮大進（宮寺縁事抄、臨時祭）と見えるので、肥後守の時は六十を超しているから、間もなく没したことと思われる。ともかく隆国以後である。巻三十一の第二十一の藤原通宗の能登守任畢の年云々とあるが、承保四年十月三日散位、任周防守能登守（水左記）と見える。大日本史国郡司表は兼任と解しているが、永保元年六月二十七日の若狭守通宗の解（平安遺文四、続左丞抄巻一）によれば、周防守に任じて周防に進発し、能登守兼任の事は何等見えないので、兼任ではなく、能登守をはなれて散位であった時に周防守に任ぜられたものであろう。通宗の後任は高階公俊で承保四年八月二十四日（水左記）に見える。能登守を離任したのは周防守任官より余り遠くはない、恐らく承保三年位と思われ、隆国在世中の事とも考えられないではないが、恐らく隆国の没後であろう。なお、欠文、巻二十五の第十四は、寛治元年平定の後三年の役の事であり、諸家の認める如く隆国以後であろう。これ以外にも将来明かになるものがあるであろうが、以上によれば最も時期の下るのは嘉承であるから、少くとも現今昔物語集はこの時以後に作成されたものである。しかしながらこれ以後の天皇・大臣等は勿論、他の説話と比較する時、これ以後に属する説話で本集に入れても差支えない性質のものが数多くあるにも拘らず、採録していないことは、作成の下限がそれ程下るものではないことを示している（この項の稿者は英雄）。

本集の構成

本集の説話はすべて千二百余、天竺・震旦・本朝の三国に大分される。震旦・本朝の話の中には、天竺の説話を粉本とし、翻案するものも少くないが、今左様な内容中心的な検討をさておいて、専ら各巻相互の連絡と特徴とを示す目的でその収容説話の要約を行なえば、大要次の如くなるであろう。

巻一　天竺　釈迦の降誕から出家・成道・教化に及ぶ神話化された仏陀伝
巻二　〃　浄飯王の死・摩耶夫人の昇天から、仏の説いた各種の本生譚に及ぶ
巻三　〃　仏の生前における種種の教化から仏の涅槃に及ぶ
巻四　〃　付仏後　仏滅後における仏弟子の教化・伝法に関する事
巻五　〃　付仏前　仏自身の数数の本生譚及び仏の成道・出世以前の説話を収録
巻六　震旦付仏法　仏教のシナ渡来・弘通・流布に関する事
巻七　〃　付仏法　大般若経・法華経の霊験譚
〔巻八〕
巻九　〃　付孝養　孝子譚、死後動物と成った家族の話および冥途往還譚など
巻十　〃　付国史　シナの史書・小説類に見える奇異譚
巻十一　本朝付仏法　仏法伝来の事から諸大寺建立に及ぶ
巻十二　〃　〃　各法会の縁起から持経・誦経の功徳に及ぶ
巻十三　〃　〃　主として法華経読誦の功徳を記す
巻十四　〃　〃　主として法華経に関する霊験譚を記す
巻十五　〃　〃　主として僧侶の往生譚を記す
巻十六　〃　〃　観世音菩薩の霊験譚
巻十七　〃　〃　主として地蔵菩薩の霊験譚を記す
〔巻十八〕
巻十九　〃　〃　俗人の往生譚から仏教に関する奇異譚に及ぶ
巻二十　〃　〃　天狗・冥土往還の話から善悪の現報を感得する事に及ぶ
〔巻廿一〕
巻廿二　〃　藤原家に関する奇異・因縁譚（八話のみ）
巻廿三　本朝　強力の男女に関する逸話
巻廿四　〃　付世俗　芸能に関する逸話
巻廿五　〃　〃　武士に関する逸話
巻廿六　〃　付宿報　民間の宿報譚
巻廿七　〃　付霊鬼　鬼・生霊・死霊・狐・野猪・迷神・山神に関する妖異譚
巻廿八　〃　付世俗　貴賤・僧俗に関する笑話
巻廿九　〃　付悪行　強盗・犯罪の話から動物に関する奇異譚に及ぶ
巻三十　〃　付雑事　主として和歌の贈答を伴なう恋愛譚（十四話のみ）
巻卅一　〃　〃　京都始め各地方における奇異譚、また、古代の妖異譚

参考文献

一　底本・校本、古辞書類および大蔵経・南伝大蔵経・仏典説話全集・カウエル氏本ジャータカのほかに、出典の検索に当っては、岡本保孝手校に係る内閣文庫本B・芳賀矢一博士の「今昔物語集の研究上」・「南方熊楠全集第三巻」・干潟竜祥氏の「本生経類の思想史的研究」の恩恵を受けることが多かった。

二　本集の本文を活版に附したものとしては普通次のものが利用せられる（ただし抄録に係るものおよび天竺・震旦を欠くものは除く）。

国史大系本	明治三十四年	巻十七・十九・二十の三巻を除く二十五巻を所収。天竺・震旦部は流布本に属する押小路家本を、本朝部は古本に属する旧丹鶴本を底本として使用。従って前後の本文が二種に割れていることが欠点といわばいわれるが、旧丹鶴本刊行以後、最大量を収め、本集を流布せしめた功績は大きい。宣命がきは実施せず。
丹鶴叢書本	大正元年刊	二十八巻全部を所収、ただし旧丹鶴本に欠けたる本朝部は国史大系本、巻十七・十九・二十は「残欠」（明治三十六年刊）により補充。流布本による部分をも宣命がきにした点、活版本が旧刊本の全容を忠実に伝えず、旧丹鶴本がその底本といわれる新宮城蔵本（即ち東北大本）と小異を持つ等、細部に亘っては言うべき点も無いではないが、本集の全貌を始めて世に弘めたものとして歴史的価値を持つ。
攷証今昔物語集	大正二年より十年に至る	古本としての佳良な本文を持つ田中頼庸本（東大図書館旧蔵、関東大震災で焼失）を覆刻し、更に岡本保孝の「今昔物語集出典攷」を基にし、各説話ごとに出典を抄録して掲げる。爾来斯界の権威として学術研究には必ず使用されてきた。その覆刻態度は大概古本を忠実に復元し得ているが、本冊の随所に指摘した文意不足の箇所・不整表現もしくは古代語的表現の如きは、多く編者の見識に従って校訂を施したために埋没してしまった点が瑕瑾として惜しまれる。

新訂増補国史大系本	昭和六年より七年に至る	鈴鹿本によって、諸本の欠失部(巻二、第廿五話の大半と第廿六話以下第四十一話に至る部分、および、巻十七、第四十二話後半から第五十話に至る部分)を補った功は没すべからざるものがある。底本が二種の異質的な本文に分かれること旧輯本と同じである。比較的多くの本を使用し、厳密な校定を行なった如くに見えるが、底本が粗悪なるため、覧る者に多岐亡羊の歎を発さしめる点の有るのは遺憾である。宣命がきは実施せず。
校註日本文学大系本	昭和元年より七年に至る	流布本に属する文理大所蔵の一本に拠り、ひらがな交りに覆刻。段落を設け、多少の頭注を全巻に附した読み易い本文を提供した点で歴史的意義を持つが、本文はかなりの程度に古本を交えているようである。

三　雑誌の説話文学特輯号で参考となるものは次の通りである。

国語と国文学	第十八巻第十号「中世説話集の研究」	昭和十六年十月
文　学	第二十三巻第四号「今昔物語集」	昭和三十年四月
国　語	第五巻第一・二合併号	昭和三十二年四月
国文学解釈と教材の研究	第三巻第十一号「説話文学の総合探求」	昭和三十三年十一月

二　特に天竺部について

一　組　織

本集全体が大きな体系のもとに組織されている如くに、各巻の内部における排列についても或程度の秩序が存するだろうというのが我等の見通しである。一言でいえば、それは編者の脳裡において構成された仏教的教理に基く連句的展開ということができようか。

巻一　a一から八は、仏の降誕から最初の説法までを記す。b九は舎利弗が、得道後、外道と術を競べたことを記す。c十から十六は、仏が提婆達多ほか外道から受けた迫害、十七から二十八までは、仏の近親はじめ篤志家の出家を記す。d二十九・三十は、合戦に敗れた逆縁で或は得道し或は急難を遁れた話を記す(二十九は阿闍世王の得道によりc群と聯絡を持つ、三十は帝釈が蟻を踏み殺さなかった善根による功徳という点でe群との関聯を持つ)。e三十一から三十五は貧人がわずかの施によって、三十六から三十八はわずかな善行で、それぞれ善報を得た事どもを記す。

巻二　a一・二は仏の父母の死・昇天(一に仏が父の臨終の床に本生経を説いた事が記してあるのは、以下に展開される本生譚の伏線かと思われる)、三・四・五は仏自身の本生譚を記す(この三話は、仏が病比丘の悪瘡を癒し、父王の難病を医するため自らの眼・骨髄を奉り、また、捨て子を養うという点で更に統合され、bの始め、病臥せる老母の話に接続する)。b六から二十七までは、貧人などが前生におけるわずかな施・わずかな善行の功徳でこの世に或は長者の子と生れ、或は尊貴の身分となり、或は天に生れ、或は奇瑞を現わす事を記す。c二十八から三十三までは、前生における殺生・偽証の罪により今生で悪報を得た話を記す(右のうち三十と三十三とは主人公が善報を得た話をも併せ記す複雑な構成になっている)。d三十四から三十七・四十は、前生で犯した罵詈・悪行、三十八・三十九・四十一は前生における慳貪の罪により、今生で悪報を得た話を記す(右のうち三十五・三十六は、さらに糞を食う点で統合され、四十は善報をも併せ記す)。

巻三　a一・二は文殊の、三から六は仏の高弟達の事蹟・逸話を記す(六の、舎利弗が牛と化せられた話は、以下動物を主題としたb群との関聯を持つ)。b七から十一は竜に関する話で統一される(右のうち、九・十は更に金翅鳥で統合される)。c十二・十三は鸚鵡・亀に関する話を記す(十三に見える亀は、次群における醜貌と恐らく関係を持つものであろう)。d十四・十五は、醜貌の王女・王子が仏に呪願して現身に変貌する話を記す。e十六から二十一は、臣下対国王・沙弥対比丘・婢および飼犬対主人の関係において起った奇異とその主人公の前生譚とを記す(この群の起首十六と前群との関聯は、仏に対す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com